知性」を意味しながら、後に五官と区別される一種の統合的心的機能を指示する仏教的概念“manovijnana”の訳語（一～七世紀）に転用された後に、両者の義をもつ語として我国に移入されたと考えられるが、江戸後期にはそれがほぼ「精神」と同義でかなり広く用いられるに至っていたとの推測も考えられぬ訳ではないが、なお更に、吟味検討の余地があろう。いずれにせよ、「解体新書」の「意識」は東西医学の交流史、意識概念の医学における変遷を考える上で、興味ある問題を提起するものといえよう。

（京大精神科）

薬業史研究——大和売薬とその消長

大槻　彰・○松下正巳

古くから奈良は「薬のふるさと」といわれている。確かに古代や中世の宮廷や寺社を中心とした医薬品の生産の事実は多い。

役小角や鑑真にはじまり、中世における「招提寺秘方鑒」の薬方で知られる奇効丸や西大寺豊心丹などの史実に明らかである。

しかし、これらの医薬品に関する知識・情報が当地に集積され、それが民間に転移して生薬産地の基礎となったことは否めないとしても、大和売薬の起源を古代や中世に直接求めることは無理と思われる。

江戸期における大和薬草産地と大坂薬種商との結びつきや農閑渡世または農家の作間（副業）としての役割が大きい。それに加えて、これら薬種商と合薬屋の株仲間組織、配置販売と行商範囲など、大和売薬業の沿革を明らかにす

るとともに家庭薬配置販売業の現況に触れてみたい。

（ダイオーシステム研究会本部）

顎関節脱臼の疾病史

谷津三雄

古医書のなかに落架風、落花風、落下頰、頰蹉、頰蹉、頰車蹉、脱顔などの病名をみることができるが、いずれも急に起こった〝あごはずれ〟のことで、今日の顎関節脱臼である。

一方、この整復法として有名なヒポクラテス法があり、この名の示すごとく洋の東西を問わず顎関節脱臼は古くからあり、多くの治療法があったと思われる。

神保等菴玄州著『外科衆方規矩』（貞享二年〔一六八五〕初版、宝暦一〇年〔一七六〇〕再版）には「落架風」の項に「飲酒ニヨリ或ハ大ニ笑或呵欠（カゲン）シ、下脛（カキヤウ）落テ合架スルコトアタハス」と述べられ、頰車、下関に対する針療法に漢方薬の併用療法を行っているが、これら療法では整復しえなかった症例もあり、又法として「含両手ニテ按下（モシオロ）シ即拍上（ウチアグ）レハ合フコト神